昭和返り

帯広市医師会
JA北海道厚生連帯広厚生病院
新（あたらし）　智文（ともふみ）

「昭和返り」私は自らの最近の行動をこう表現している。

私が生まれた1960年代は高度経済成長期であり、その後もしばらくは国民一億総中流社会などとも言われ、まさしく世の中が右肩上がりの時代であった。

我が家の白黒テレビはカラーテレビとなり、土曜の夜８時は決まってドリフターズであった。真っ白な冷蔵庫には牛乳瓶だけではなくホームランバーというアイスクリームも入っていて、当たりが出るともう一本もらうことができた。また２槽式になった洗濯機から取り出した継ぎ接ぎされたズボンや靴下を庭の物干し竿に掛ける手伝いをしたのを今でも覚えている。

小学生の私はラジオの構造が気になり、古くなったものを分解してみた。恐る恐るネジを外しトランジスタやカラフルな色の線で何Ωか示された抵抗などが基板にハンダ付けされているのを見てワクワクしていた。見えない電波によってラジオから音声が聴こえ、テレビからは映像が流れる。とても不思議であった。その後BCLという海外の短波放送を受信することがブームとなり、エアメールで受信レポートを送り各放送局が発行するベリカードを集めていた。私の愛機はソニーのスカイセンサー 5900だった。

父親が乗る車はエンジンを掛けるとブルブルと車全体が揺れはじめ、家族で出かける時には助手席に誰が乗るかでいつも兄と喧嘩になったものだ。父親の左手はシフトノブに、左足はクラッチ操作でいかにも自動車を操縦しているという印象であった。サイドミラーはボンネット横の前方にあり、手動で角度を調整した。

家族旅行のお供で父親の首に掛けられていたのは、シャッターを押しては手動で巻き上げるフィルムカメラで、ピント合わせも手動式であった。交換式のレンズは沈胴式で、いかにも器械というところが私の心を掴んでいた。そして合言葉は当時も「はい、チーズ」であった。

最近の短波放送受信機はデジタルな部分が多く、昔ながらのダイヤル式チューナーの趣がない。中古のスカイセンサーを購入するほどの熱はないためラジオではなくオーディオを10数年前に購入した。とは言ってもレコードプレイヤーではなくCDプレイヤーである。プリメインアンプと独立したものではあるがハイエンドオーディオとは程遠い。スピーカーは古いウィスキー樽を材とした漆塗りの限定100台のものを購入した。ある意味中途半端ではあったが、これが私の昭和返りの伏線となった気がしている。

現在の日本ではほとんどの車がオートマで、さらにエンジンのEVへの流れは加速しつつある。追突防止、車線はみ出し警告などの装備は当たり前で自動運転も現実味を帯びてきた。安全に楽に移動することは自動車の目的にかなっているので、このような流れは必然であろう。最新の装備が搭載された車を持つことは、ある種の優越感にもつながるのかもしれない。

しかし私は違った。昭和返りである。スズキのジムニーシエラを納期１年で手にした。ミッションは５速マニュアルである。悩みに悩んだ末にバンパー・グリル・ボンネット・足回りをカスタマイズし、左手・左足も駆使して運転操作そのものを楽しんでいる。休みの日に朝から洗車していた父親が使っていたのは円を描くように塗り込むタイプの固形ワックス、私が今使用しているのはナノ技術による液体タイプのガラスコーティングである。技術は進化しているが、洗車にいそしむ私は在りし日を思い出している。

カメラも買った。富士フイルムのミラーレス一眼レフカメラである。フィルムカメラも持ってはいるが、実用機としてはデジタルである。子供の頃に夢見ていたレンズを交換しての撮影は写真の幅を広げてくれる。望遠レンズで風景を切り取るとファインダー内から人工物を排除することができる。風景写真の基本は意図しない人工物を写し込まないことである。そうすることで実はすぐ隣に電柱があるのだけれど、写真を見た人に壮大な自然がさらに広がっていると想像させることができる。

50数年前のあの時代、幼少期を過ごした昭和の一時期の記憶は、こうして今私の中に蘇っている。過去から現在、未来に向けて、様々なものが繋がりながら進化している。その中で人は過去を偲び、特に子供のころの記憶を懐かしみ、時には技術の進歩を寂しくも感じるようである。時代の流れは時に速く、時に緩やかである。

早朝の雌阿寒岳の林道に車を停め、数本のレンズを背負い深い緑の森を行く。幹の太さは樹齢を想像させ、コマドリの美しい声だけが響き渡る。この自然は時代に流されず普遍であってほしい。午後には帰宅し、北海道のミズナラ材で作られたタイムチェアでドリップコーヒーを飲みながらゆったりと音楽を聴く。そんな休日が私の明日への活力となっている。